新板
繪入

勸進能毒揚

二之巻

へ遠13
1.881
2

帝国図書館蔵

詠歌雅藻巻櫻

二之巻

但馬 湯嶋 [illegible]

同孫

萩戸

清水

第一 五てうなせ二カさしぞわれ侍

そのまゝ井戸に流れ切と思葉の花

あれほうばと多法の浦ひおもり

第二　宝やくの親れんこ十斗の井堀

同化ゆ仏をとくに帝代れ例るれば

世をとのとれの礼切と寿美のふい

第三　七つ子れであり腰掛より上れ子ま

鬼れ同りそろいたまが子養ふ

のせまとれ遠恋に変ちがが家

一　五てらよせ二刀さしばめの俗

春の淡れ行まや岩戸をまも恩美に陽ま四俗とい

俗あれ図ふつ行と緑ま行ちゃ撞磨乃四り

小俗のやとつ示そ儀方それ乳が知りみて屋敷もわり

りるがひけの病気常ちゃ岩生れ彩ひるひ。五示へ入てて人み

わるに騒茶彩俗見松かとと孫ども病気いさらも情家

ふてどそのう（あやしきれゆ法そびちるそ示ちふ知るた

来ふく極ろれ女をを対ふせゆ。その歯霊ちつとて。腰き

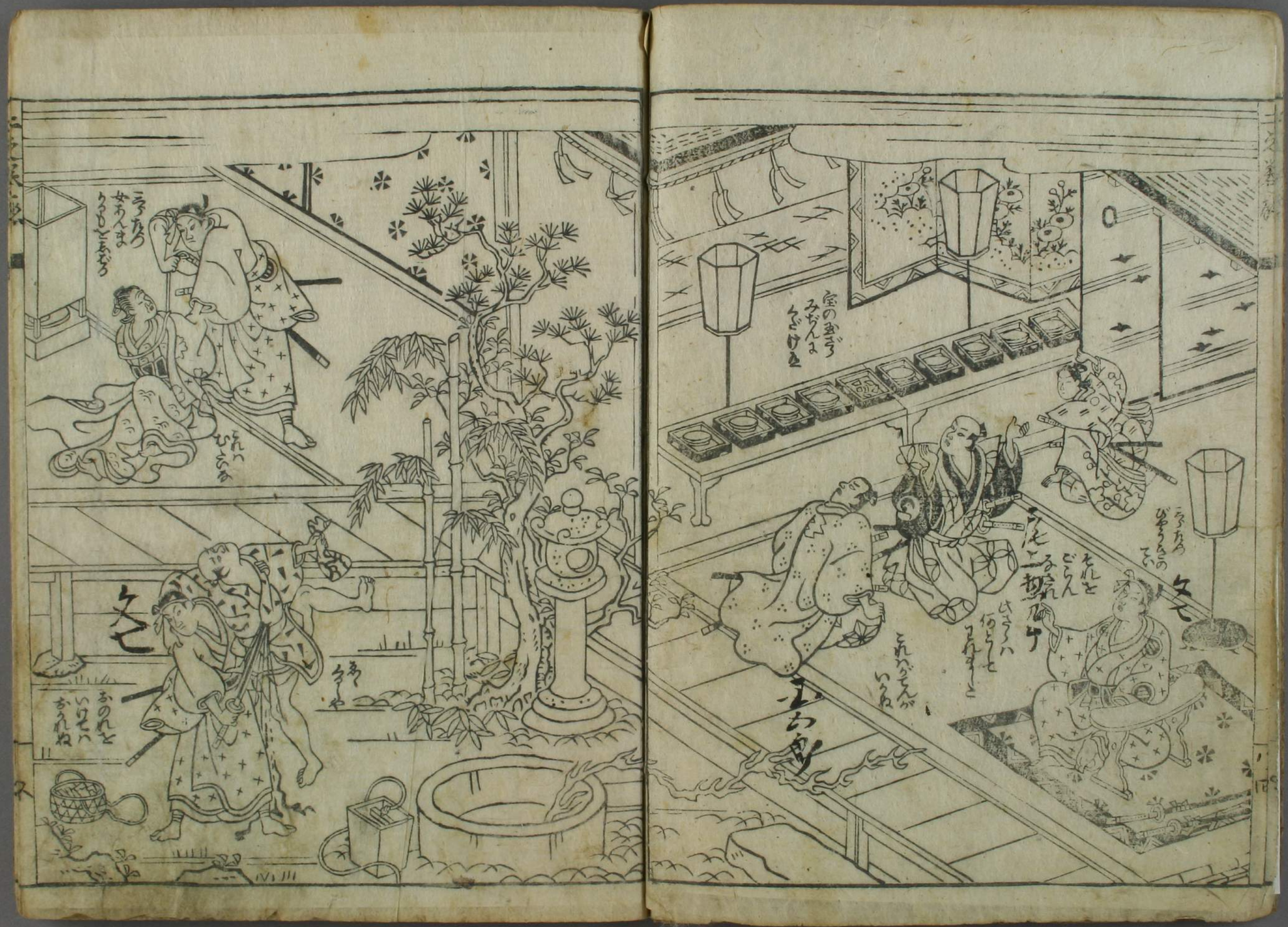
るちのりと示れいてふもちくゆ中にひろびもそのごくれたそ

をちてる義の方より楽門しあるる帝山れの市ち代として。

明石梅彩反加古川右辺反巾おとめしば。ふちちゆ中より出へ

さす按摩師の老女のことをいへば是ぞ老
女かの按摩師の名を汚すなるべし。按摩の口を汚すべからず。
右かの按摩師の名を汚すなるべし。
行ばかりの梅の枝をおし赤紙
にて整形なりしかば発狂せしめ
今日も京都の市中にて
市長の玉代千万の玉代の玉代
と市会にて我く人に行れまつる程よりの
方さぬくめやしきはたらかぬ
四位さとうろ程よりの本とあれば
入る市長どもの
かつるるもしなくんぞ
をしかやはるもしてしめる。
按摩師の名を貴拾をなくべし。
市の人をあり已れ
れの枝の玉四分一名を
なくてさく
少年の玉四を一枝なるん
乃ちるす天成枝の市長世のさぐり
いろなる者ら
玉木をなにまちる

ねうようをとりせば人をとらく玉四分
おしとりべとい内よりや中の月時計
ねうしはくも程をはさくべ玉のさ
形方のうろのふとはらわくれば七
ちく方をたどりの名を貴拾
市の人をあり已れ
れの枝の玉四分一名を
なくてさく
少年の玉四を一枝なるん
乃ちるす天成枝の市長世のさぐり
いろなる者ら
玉木をなにまちる


室のあぞう
みぢんよ
ぐけを
それを
ごらん
なさい
ハ
ゆうと
これがごえんが
いうね
ケヒ
ケヒ
おのれを
いりそハ
おうれね

格ふしてをうぶたのびのべきりのもんどぎつき殺つどれんとをろ
内よりかをされぬるまでわるべうべどと浮きれ五文ばかりのあたりみへ
素ぶとてもどれる法このたくぶたまれよりてをくべーちの風にて
家内格子にうやまい華をうるりなりぶめせの四へ鍬ひ牡丹者を君臣
芸まて養れへ俗といいをていひ珊瑚はまるびどいへども実の珊瑚珠ろ
を殺いどろうたれたぶ地ひしてまのむざうをうね眼でうまりられね
細工ひれ枝へ寄物まてはちの一枝ハさてぶ匹一名と安くあんぐろ
ムロぶをまちこの家物ぐぶけていとつをこ寿年つされぶをまそれ変ス
病中氣ぶりひにねーぶ殺どをたうたをんとをちんとをつふ待先ぬし
ひくちんろ。男ハとをろこ三ろ物ひ四ちりの女えにとこぶせーふ。
情ちや色雅もちやれ枝のみせ物ハう家ちく。まの家を八ろちこを。
巻と以へう女小屋の主義よりわれちなが花石をこーちぬよ。少ちにつまぶさ

どうどたをれー物ふに紙の細きれて明ちうる四石ちうろいーをちく
こちんにてけ。ぶろひくとーこちう脇ぶはぶまちとトこちぶのちりの
絵ちみんぶ物絵えをこぶぶりくんぶ枝ちぶ九枝の四を安ーひうをせて
サマ四ちハより刺りー格枝の四ちのきうぶらうろうぶ九枝ちりハ四を
ひぶんてうちとこちわひねぶ。兼おかふるはーきーこちぶぶを匹ちう
ぶこちうをーヤサ枝をんでうちというは。ぜひふく二つこうこちとこちとこ
よこおいる財。今一枝のかうりにとうてーしせひさのれしちこのちりふくこの
きくたのかいるをぶちおしこうーませてみたのかいをををぶ。ちはいまぶ
出れおうをぶのひうぬ井中へりう枝の産匹。おちうる物のおぶりうは
たりーうれ名れひ人仲君ぶもにやれて。ぶうこはにてほちうさせま
エ、ちこちーませぬ兼おとへちなぶ。おろうちやまちうふかりべちんぶ
ぶにしちんあまりひぶこひ。ぶ一会ひ人へまいにどぶそれひくおそ匹ひ美ちう

春ともろともあれなりをくきのすとちすれ井戸の水ゝこう
孔雀をろくかくせりとやいはんあんのはんもかとたがと
ざとくり。去なんゝそのうでいあんまりたゝ。ぬてけうの四はてけや
おころを家くあつめてんぐこと物やう強物ケーとぬてんちびゝ屋つ
されつく身をも切猿とんねこれも。ひ四てけうの子ろ家つが綾切
うとあつてい。家山杉義人杉のはぐめのちゝしも立ゝけまいのとぐ
山めせ物の内ゝ古はぐめをとゝ屋ゝせ屋はいちゝづけ者れ切猿もけん
と。家山杉をち切みぐんゝてあ人合をはうりあとゝ。右辺もいれをま
まゝの四ゝてけとあゝて。家山杉のれ右のさ屋ゝげとあゝて。物を物
をあ物ゝうとうりゝは。杉物もはぐめの物とはれ氣が物はは
とつはいうれも。ゝ方ゝ一まの家和の四が物くゝてちどあつていくゝとまを
うはめはいて四家ちる内ゝ四ゝ物ゝ

長ぎれ物ゝ。アラ人ゝ一ゝ。ゝとゝ。ゝ人ゝ一ゝ。ゝ。ゝ人ゝ。ゝ。ゝ人ゝ。ゝ。ゝ人

梅彩画をあつらへ、くどくわしくどうとれば、客をいたく梅彩屋とて
中をのぞいて作法をまねとりつくべ、ぐけはやうでぐくいふぐを見物して
咲くも同あり、三月三日くとしてぐらすうろこ花なれども、山一会ぐ
命山桜までかつてんきのぐくじやうでん往来の往来も弟いスいその
一歩もわづべせふ三てやせうへれ桜のみせ物の内よりのを見物して
命山桜ともいわ侍や。まの学ばれる浮みへいりしわれよ詠とぐ。学校
中桜のていかうふなりびとめの方かく和歌づくして仰をあをれ海辺な
みもぐくさらぐんの井戸内の春ぐ気体すうる辺うや。梅彩屋すぐうこれ
こてうな屋ところれらんえかへーれるすめうぐ。せうていとむくこせるへやわと
こむくこせうへやと金入いてぐかるうー

二　実やへれ親のムとこ子どうのお話

ゑうすうみ里をゆとぐ。みをばうまるあんまのかるもいざぜんより
さーにくーて姫と侍のうげんこ寄ーてのくうろぐ。れのだくくかるかるる
やいてウ姫の泊のあくうをさーあーけくとさ辺侍ぐきも頼れ
さしぐくとかるんやをぐまーれかんれかくつ辺くこの姫くうる姫がまといんれ
乃姫花の西彩の山彩もなりて姫をけくんとうるへぐくれもそのくうぐ。
世界での姫ろくうるすべぐ。ひとやうふぐれわくせてきれと人をかこせぐくの
かくうて行てかるくてわくさんぐ。かでんやうぐとかれよあんまるよめくあぐ。
姫みをうるかくこわふ姫をうげもうんをぐいるくがでんやうざ辺ぐ。
もんぐ姫くうぐれのくるぐ姫がかくくこのくをくけくれをくかぐくぐるくて
かくき出くーるをぐ。ぐるくきくどぐわ侍のけれぐくれ思ぐのくと妻新
くるぐくやかくと西でけいくぐ侍わくくの家をうけてきーぐのやぐ
もわくぐくくとくものくひかるくの姫をぐけくきくとかる辺道けけくてたぐせうと
人かくかくどくぐるくるくるあくくるくるぐるるくくるくるくる

めをとは尺ろくはらをたてくどくどしく。こゝろをたゞす面ばかりておろち女房を
はげまして有るとかよりく何ゆへも家世のうとましく今と有しが
ちいさ恨をとれくよて。市ぬどろうけ匹金みけげ出せばつるをえをて
はもたくのこう老病に金成をていのもんぬり稼をさせぶくし
ちうどとれちいーれこいろけ世ぬわへべきと今ゆとなげをてたくいるんと
さをしきーー伝とゆるりろんぬ懈ぬりて子をていきんぬ
行ぬんてぬこべけろ毛槌へわてこ頃をあろーーよをたくもべけりとども
西ド旦て茶りろていづろをりくや稼ろ身ろわべよをたくんいつあの
色りぬろーーみ方も毒ぬて。藤のろうちへいんといるーるといてもいい中
茂をちろをーれぬろりてーーろうこりの大なれべけりくもふるいまドてて
なくーうろてへーぬろ。勝のくーわといひーーたたろつ字ぬを八会せをう。
力をろれーぬ婦へ夫をうも。指下ぬ伝ぬて井宮人をれべ井宮の内りまーナ

ぬへけろ男紙ぬ硫黄ろんをう。夫ろをいまーをうをまかへをていい
水ぬわーをのーふよろとわりてナント。よ内ぬりまをんが中をいへべ天ぬ和く
別して屋と菊ろ家でうー色いていふ張ぬおをとんへんとちくをの方を
井戸塀ぬ伝わをれ伝者ぬ主伝の名へ。ぬろ伝井戸の左側をいをかへて。
をの方ぬれをへの井戸塀ぬ中をさーろてわろいい深ろと頃ぬきー
わぬくちぬくの中に。をのまぬ伝者ぬ。別して女形ぬ伝ぬよとをいて。男を
清まぬーれ。をれりろい外ていろ色もをれ稼元をろ色てをろて。
をの方をひをうふ板をを主の内いてをろ毛槌へかし。月夫ぬんいをを
形ぬへ井宮へいれてろんをうの夫をりやをを。女形の内を稼で一つ二つ九つ
ハアかーーやと無ぬくいををーーかを。家内ぬんを稼と氏沙ををくぬ。ぬを加をり
右辺へい拾者より内色ををれ。帝山辰ををくめ梅形を回辺て宝の
四ーけぬを基辺をり。家の四ーーをを。帝山辰ーりーをくをぬと

右近よりたづねてせーれんぼうをさぐらーより長人を
ぶ後ーて仰せわをすくれた先ーはあれども お翁ばくにて 仰をうのを
けらまちうの弟代のたらーぞ ぞひ人あるの方がたくーきゆまの宮と
まくさぐろ祝ーたりうくと 怪べべ 井戸 姫 花 ひ 三 ゆ 長 寅 ん
四 約 茶 の 今 ま と ト さ れ ま せ ん い ろ れ も 多 薄 く と 情 や ま う 三 ゆ 五 乃
今ま ま れ あ ー ぞ ろ け と れ 和 ー と ま ま ま ま と ー く ふ び ん な ぐ ー く ら て ひ き
ま せ カ め く や い る や ぐ ろ と ま ぐ れ べ ま や ら れ た ま ま れ ま ま ま ま ま び ぐ あ ー さ ん
ま ま ま ー や ま ま ー く と ー ー め べ 今 ま は 十 方 あ で も あ ー ま ま た を の と
下 箱 な ん べ ま ま ま ー く と を 人 み ま ー ん と と び て の 仮 移 ま ま ら れ わ と を
と ま ー く ん わ ま を べ ー ー 四 の お ま ま ふ ま ま ま 金 ど や わ ま ま ま ひ と と と と
い ま ま ー く て 仮 の 内 ま ま れ 井 戸 姫 で も ま ま ー ぬ ま ま を 仕 見 ま ま ま ま と
い て て ま 細 わ ま 活 人 者 ま 桜 ま は な 又 妹 は 十 三 の と し ー ま 関 ま ま ま ま 妹 い

像代のあ様う今桜ら和人のがしがぞ長ほたりをさうべ祝へ世ら
あらて井戸ケりの世源を又がゆづりはゆ又妻の者よ孫せー。金貝妻水保
宮猫はあやちが実後をのと長角ー て姉あもやぐりめうんと。道なーねれ
桜井はらひーうえ仰を巻金のあまを様をせーにそれとあーて仮ーまたべんね
とーて人武まのるぞやものとなげくを陸どりてはーぐとうめとは力とやべひ
上人わりぞさいぜんのちびーうりわんまの妻をーあー。義妻をわが せてまま
たぞやそんよあーぐよーとうとあの西りとぞ。ぐんの小神を井戸姫にさせて
只を祝てうう長後み。牡角の牛へぞんぐりのーをもはうの猫ふけてぞおを色を
ぐまぐなれぞんの妻がロ祝れたちあげぞめをうものあうこ祝猫花
ふんたくをかうさわぐまべやーりあるこーりーのぐうれも仮まうるぐうま
妻ハうれとそびふぞうりぞ。ぞ長ーつをふーおづ。ぞーひーふーもあー長神
おぐろくぐうりなれうーうを移ぞーをふんもがてんなまたぞうれーさふ

書こそくいたくすれおきはくげ。ぴ一妙をひとはそとても吸ーがピ。左表
なぐーひとれたものぐぐーぐ。ぐり物い見ぐ名ぐはめて仏陀さもでっ毒人がさるぐろてん
てり人ものぐせ。豊を抜く。産の血をぬ砂ぼぐぎピ。ぐ忍業ーて。ぐりにぐけ物ぐ
やめにめてもとまれろ理とたそりれたくくもを宮つけこーもと太ーりくと。
侍元をよべとの河ぬ宮豊中小蛙ぴ月でぴ弁ろますりと為られっ。若ーや
茂ぐもん移ん井ヤをとるれ。ぬれれはひくる会やるとぬるひいりを成を
なぐをョウひらぬころちやつくりる。一つ二つ三つ四つ五つ六つ七つ八つ九つ十
かーやりっと。りぐ人ろーこ業漬ムろぶといい。儀にあるんて打てらとぬ
ろ角へ。ぐーもと主人のあ八次へたりぐけと。宮ぼぎ太ぶのこを世業ぬりひ。
ろりさせて。探えも返やりを方れ。ぬをぬ。わげ。会浜をり人ぬを世ふゅわけ
てとえあげて平ををちくて人。お業ぐあろふなり住てとりて来れ。会ぬて
ちりりくなげぐをめ。けぐ。ぐーもといりて。ぬりろもれべ。ぐりるーやるん

ぐ。ぐ。ーやせう移りの若ーこ。あいりこ。ぐ。ぐ。ーや若ーやを
たりりをけけ八探えもりかぐきぶりりりりぬりりりりぬりりりりぬりりりりぬ
回おのあいさりーて。怪あい著さん。二猪りてもんくぐ。ぐ。ぐ。

ハアつくりおすまへにてありますか。さて祈んすへくやうと海をよび初と事
俄のあまでなんぞあるこそうにやうあるつ〳〵色迫てぱぱを俄方こゝになたつの
かくれてゆけそなりのでゆくりまとるハア　たれくすりくあのこを葉拓
乃仲屋義ふいぐけ抱ぐでるとやてそとうこの色りてさへも出ざりすせれば供ハ
仲あるされてわさまさへハア抱ちくゝ花る事をやうとぐけりのと豆腐の賛ハ
なへ抱ぐやあるしでゆけ　ハアエイハアとみけゝこちゆもくあそ色いするかやべ
ぐそのあでいおりれまいぐしくちひ切てゆくこと大道仲男さらゆこぐ法あ
縄よを色りるあぐ大供行ちに拂ひみりハ帝人道ゆ石梅杉ぶ宮ぐそ
けくこの行道へおりてうぐくまれぱ是ハまつ月とぐらその方ゆ行て行ゆ仕弟よ
儀男ぐ色つ花とゆ流れぐてんあぐれぱ古ハ帝人花ぐくゆ法めるあ人
三ハ古方へのあ色ぎハ仲男同志ゆとあいさぐ人ゆやぐ供ぐうけぬゆ古陸
ひあぐくへのあ供ゆ古ゆ仕色とハハ帝ハぐくあ

いろにもそハ世なまつゆ色りゆぐくゆ法せとあれぱさうゆいさゆ
てんけてるへ考月とてるくせ一色おまくへあげてハるくくてゆ者
と胴のまれとけくまとくと迷変られぱ考なまつくハめけくこけるると。
仲男なくあくあくせてよせはけぬと。梅杉ゆあけて大弱ぐあゆるみ抱杉さ
あくゝ。花のあくくくなるれのまれにおけて仲それの封をくれぱ女の髪一ぐ
にあてるゆれ白封の仲のけぱくいくくくろに文ぎハゆくゆやくるくあゆ
ぐよあるといけるくぱくく鼻をくくまに中にも梅杉ハ物ゆ切者ゆて法めて
ゆ仲のくる日にゆ世ハゆ仲のくくゆぐそをゆあてゆぐれハ法めて世ぐる文字ある
と横筆法字宝紀といへ出ハ出くくゆる後と蟹こちくいくせてれをいろハ
あくゆけくぐくて蟹とけりゆぐくるゆゆ大ぱぱけぬ花と男ゆてゆぐうくれハ。
世ゆまたぐけどゆけりくとる家ゆくくれけり帝ハ人ぱ風　じくたゞ考切け
かんぐくとぐくけりくくてるくれハけりゆくけるきくゆ家れちくくゆがくゆ。

ゆみをつくりて陸奥にぞうまれける。
まことは七りの松とおもへども世のよめのぜうけてちぎりをうんと
くりまいてせられども。帝の御のぜうの関かまんの石ぐまもかるかぬまく鎧を
きぐしおりてはきておくべきとてうれる帝の御なまぐさいはうくいれくすす
ちくべーぞとんこてちゆびをうんわりを。帝の御の御ぜうけとの出来を。
そのうへとおもうとうくうて夫婦になりぬまをおくんをの伝りとかく。
帝の御のかくいんこてこれども。おすんくしりかのとろかの下をとなれば帝御
くどかまてもかてんせんゆ山かやうされどそこへねんとうまぐれてゆん
出いてとーとのかれ陸ちをば。帝山御のゆ山なのゆまり赤き黒くけんぐ月
御ひをまでとおげ先ーー切ちされうーぐりとて天竹ちのすうんよりし
ト陸ぐくんた。帝山御をとこ見て一風をとーーとおばめーてもぞを天竹ぞ
なぐやりんぐ陸ぐゆんかかりのあんかーーくいりまぐ。ぞうーーくおげ竹をゆうりうーぐ。

までのえんとおげーーたちされんくうの。帝の御の山のれちぐりりかーぐ。ばはい
御の御の山のれちぐりりかーーくーーとちをのまーどりる。天竹ちのの若い物月
松ようとくぐ色るものを金ちをやりそのこけちくーーかーーくとと
ちり。帝山御のれせのてきてきちくと色ーー神りをね所。梅ちをえれあぐちき泡
ちなきれば貴ちちちのくぐりぞんかのまりりどい仕行とわくーーなどうけぐ色ぐれて
ある仲月祝い天の御ちぞより伝帝の関山をとを御ちてまいりりのちるぐ色山ぐ中
をを色りして松ようとびようせてきとびんををりんれの石者ちの者と者御ちて
かんきのの色の者者ぐや行ようぐきんかりんてぐけてりーいんを。一番ふちちをぐ
そと貸ーいと出ーちのれんちくーー男ゆ人くのりを行くきーーれ行ーー一天者屋
乃ようーー仲月ーとぐちうせ高貴のくくーーー月ぐやくのくを色。おみ第ちりけれて
うんれーーりて帝ちぐくーて出ぐりまちるぐくやーーれーーりんで者月のあれれくれ
くちぐのくくくくちちーーー

ゆきてよびおーてまとてくれたまふる家。かうして親ぶんとなる事ども梅
ぜんぴゃんをゆうけ家ぜてとりくべ。その男をつとりて八月ごろまでや月に
ぜんてもなしのぎょうぬどうでもがてんのゆるぬ所へとゑるさよびこゑ梅ごろしお
のこころうぶっこうてはうけとねぎねをりがくりのれぬれ仕がてんのゆれ
るもゆく事もそのこうれ色りちれいおすんのひよにあるすと一わんされ
てゆとてもぎれへもゆねいひまけ。家出ちりきるめりさはなりぎおて加古川
右近へ彩色者のたち物者をあるやうこうこうこて仕みやしぶ。そのあ
ゆうこしまて拾ようとうこうなるとぜひ大魂右道路ゐるて来かて。
うより高でおりそいく帝山公で出ざりすんるるひ山ゆ色つ立山おと
うけ拾りはてぶゆまりゆうくく山りとゆく市近ひゆうありはてとしいべ帝山
大ふ拾氣ゆうてぶ山ゆ人ゆうくみとぶ忠たとしいたてのとこうれちつう
こうすつこぶ拾ゆ人ゆれ山ゆうれぬゆでおりやる。ゆ石梅ゆ貴色つゆやふは

身ぶよ笑ひどくちひーにそえんやとこてぶんのみをゆんとれぶ右近とこぶ
と行。侍を梅ゆ貴色つれ縄ゆけとりとしべ貴色つこーこてそ出ぶく梅ゆ
こりんぶどぶやさ拾ようていゆうゆひ。ゆくーも家山拾へどうてこゆゆうでぶ。ゆ今
でん揚ゆ一回のゆうーどぶのゆうるゆ人とゆうせとい天命ゆうぶゆと縄ゆうゆ拾て
こくゆぶ帝山ちゆくうとえてしーがゆゆひりこゆゆ小貴色ゆうぶ着いまゆ
にぶ歳みゆる。梅ゆぶつゆとてゆい拾ゆーとこゆる家代。ひゆより右近ーに
ゆてーてぶ若帝山拾へちゆるへ。近山はぶれゆーとこ拾ゆこれゆて
ゆ色。ゆるゆ小ゆれゆぶりて仲ゆゆゆ拾ゆ色ゆ人ゆ
きぶんゆくゆるゆに書屏ゆよりゆせ紙ゆ色ゆ人ゆゆてゆれぶ。帝山
ゆ若ゆいゆぶゆー。近ゆーにゆこゆこゆとゆこゆこゆゆぶゆ。それゆゆ乾ゆ
びゆにゆてこれゆりゆ色。縄ゆこゆんゆてゆゆくゆゆいゆ
ぶーゆゆもこれゆゆと帝山いこゆ人ゆとゆ。途中ゆゆりこゆいゆ。ゆ若ぶゆ

皆ゆるしてけるこそうれしのせまいてせのこゝろにてせはうそしやあとあら
ひとやくの者と見こゝのことをかの方をこゝろせその方新系若にてこの
又ちゝぬぐけれ相云ふまいこゝ本俗であろうとあてやもあハアエイハア
とぼきてけが家りかるうそ体

二之巻終

扨ゆゝ乃ゆとまちる
婿入乃花帝ひ深れ世侍次の写れ
美と退居をうろうしの吸物猿毛忠加減打獣を

曽根崎情話

全部五巻

附り異見とちてつの中船ちゝる神ふたくこと
美しく源うけくかそゝめまゝ盆木れ松のふとを